

231. 平成6年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その1

本年度も、平成7年3月3日(金)、「第66回滋賀県埋蔵文化財センター研究会」が、埋蔵文化財センターで開催されました。

県下では、本年度も数多くの発掘調査が実施され、貴重な成果を上げています。その成果の一端であります調査発表を紹介いたします。今後の参考に活用いただければ幸いです。

尚、お忙しい中、ご協力いただきました方々に厚くお礼申し上げます。

1. 近世初期の埋経遺構を検出

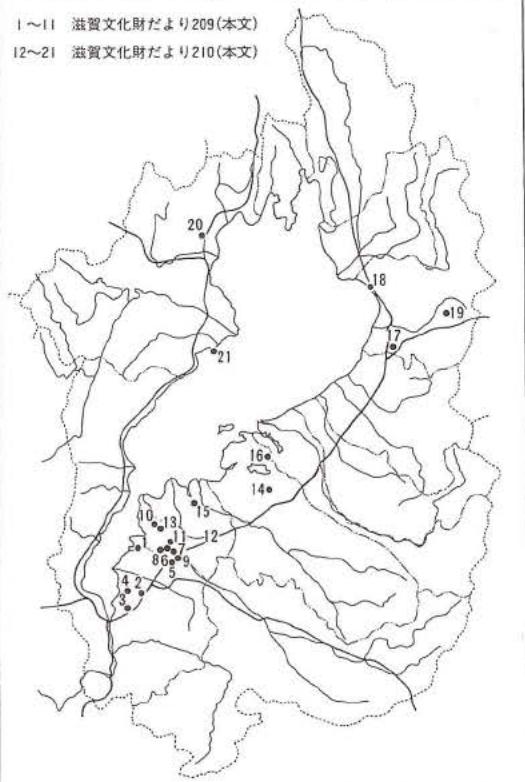
草津市芦浦 安国寺跡

安国寺は、室町幕府將軍足利尊氏が、天下國家の安泰を願い、一国一寺の建立を行なったもので、近江国では、ここ芦浦の地に建てられたとされている。しかし、応仁の乱などによって寺院は衰退し、江戸時代には、地蔵堂と称する一堂を残すのみとなり、今に至っている。今回、不明な点が多い安国寺の内容を把握するため、試掘調査を行った結果、安国寺に係る遺構の検出は後世の攢乱により果たせなかつたが、近世初期と思われる埋経遺構を検出することができた。

埋経遺構は、3.5×1.5mほどの楕円形土坑の中に、丹波焼茶壺を安置している。この茶壺内には、紙本経



経筒(丹波焼茶釜)検出状況



遺跡位置図(位置図の番号は本文と同じです。)

10巻の他、高取焼肩衝茶2点等が納められていた。また肩衝茶入の中より、水晶ならびに瑠璃片、および五穀などを検出した。

一般に、中世末から近世にかけての経塚は、一字一石経や六部経などが主流となるが、紙本経を用いた例は当該期には珍しく、また、五穀や水晶、瑠璃片などが一緒に納められていた点を考えるならば、単なる埋経行為だけでなく、地鎮などの行為を考慮する必要があろう。

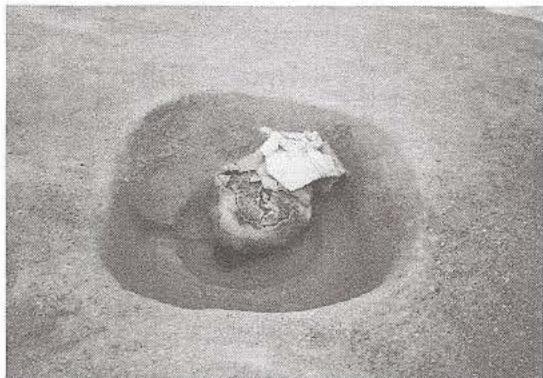
(草津市教育委員会 小宮 猛幸)

2. 壺棺と琴2点など出土

草津市青地町 柳遺跡

草津市青地町に位置する柳遺跡は、古墳時代から、平安時代までの集落跡として周知されている。

今回の調査地においては、弥生時代後期の方形周溝



壺棺出土状況

墓と思われる遺構を6基検出した。この方形周溝墓と思われる遺構は、やや明確でないものもあり、すべてが方形周溝墓であるかどうかは検討が必要であるが、この中に主体部の一つと思われる壺棺を持つものが確認されている。壺棺は、マウンド上の南側で直径約80cmほどの墓壇に納められていたもので、一個体の壺へ別個体の壺の体部上半部をかぶせた状態で出土している。このような壺棺の出土は、草津市内では始めての出土例である。

次に、今回の調査地を東西に横切るような形で検出された古墳時代後期まで機能していた旧河道と、古墳時代前期後半ごろの旧河道とが切り合っている付近からは多くの木製品や玉類・石製品などを検出している。

これら木製品の中には琴2点が含まれている。それは、板状のものと、箱状の槽が下部に付く槽作りといわれる形状をした琴の上板部分と思われる破片である。板状のものは、残存長約85cm・残存幅9.5cm・残存部の厚さ約1~2cmを測る。消頭(突起状部分)については、ややはっきりしないものの2か所で痕跡が認められる。一方、槽作りの上板部分と考えられるものは、残存長58.6cm・残存幅約17cm・残存部の厚さ約1.5cmを測る。消頭については、長さ約1.5cmのものが3か所で認められる。

また玉類・石製品などは、小型丸底壺などが旧河道の南側に約4mの範囲で集中しているところから合計28点ほど出土している。以上のような状況は何らかの祭祀的な行為が行なわれていた可能性を示すものと思われる。

(草津市教育委員会 中村 智孝)

3. 白鳳時代の製鉄用木炭窯、須恵器窯を検出 のび 草津市野路町 かんのんどう 観音堂遺跡

草津市南東部から大津市瀬田にかけて広がる瀬田丘陵には、7世紀後半から8世紀半ばにかけての製鉄遺跡が数多く分布している。これらの遺跡群の中に存在

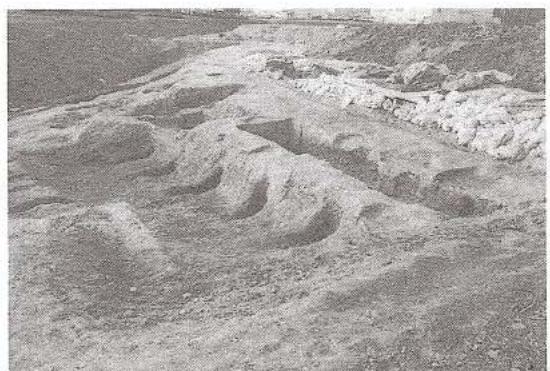
する観音堂遺跡は、これまで調査例がなかったが、会社用地造成工事が計画されたため、発掘調査を実施することになった。

調査の結果、製鉄用木炭窯1基(1号窯)、須恵器窯2基(2号窯、3号窯)および須恵器窯の痕跡1基が検出された。1号窯は横口付木炭窯で、等高線に平行する方向に構築されている。窯の煙道側の一部が調査区外となるため、全容を確認できなかったが、調査区内では13.5mの窯体が認められ、推定全長は20m近くになると想られる。窯内部の床面幅は0.9m~1.9mで、天井の残る部分の内部高は1.1mを測る。横口は谷側側面に6か所穿たれ、その外側には木炭を取り出す作業場となる側部が設けられる。

須恵器窯である2号窯は、上部が削平を受けており残存長4.0m、床面幅1.2~1.6mを測り、床面全体より蓋、杯等が多量に出土した。床面の傾斜はほとんどなく、奥壁で急激に立ち上がって煙道に至る構造となる。2号窯は1号窯と切り合いがあり、炭窯廃棄後に構築されたものである。次に3号窯は、残存状況が良好で、焚口より煙道部まで大部分を確認することができた。窯の全長は6.5m、床面幅は1.0~1.5mを測る。床面は2号窯と同様傾斜がなく、奥壁で急激に立ち上がる構造である。

須恵器窯から出土した遺物は、飛鳥IV~V型式の時期を中心とするもので、7世紀第4四半期~8世紀初頭の時期が考えられる。木炭窯については、出土遺物が少ないので明確な時期決定ができないが、須恵器窯とさほど隔たらない時期に構築されたと推測される。

(草津市教育委員会 藤居 朗)



横口付木炭窯

4. 弥生時代中期~古墳時代前期の方形周溝墓群を検出 みくら 草津市御倉町 ふすま 横遺跡

横遺跡は草津川改修事業に伴い過去5度の調査が行なわれ、古墳時代後期を中心とする時期の堅穴住居跡、古墳跡、自然流路等が検出されている。今回の調査も

同事業に伴うもので、前回古墳跡等が検出された地区の南側を調査対象として実施した。遺構検出時に方形に巡る溝跡が多く検出されたため、当初は以前の調査と同様、古墳群の広がりと考えられたが、遺構を掘り下げるに、最も古いもので弥生時代中期（第IV様式）、新しいものでも古墳時代前期の遺物が出土し、その時期の方形周溝墓群であることが判明した。方形周溝墓と考えられるのは全部で10基で、そのうち4基は一辺10m前後の規模と推定できる。これらの周溝墓とともに一辺15mの周溝が検出された。出土遺物が少なく時期が不明であるものの、その規模から以前の調査で検出された古墳群の一部と推定することができる。

これらの方形周溝墓群の東側には幅20m前後の旧河道が存在し、遺構を区切っている。この河道際には径1~2mの土坑群が20基以上並び、遺構内より弥生時代の土器が多く出土した。土坑の深さは1m程度で、土層は円錐状の堆積が認められる。土坑の性格などは不明である。

旧河道の反対側では再び遺構面の存在が認められ、周溝墓の可能性のある遺構と、古墳時代後期の竪穴住居が1棟検出された。竪穴住居は側壁が二辺しか残存せず、規模は不明であるが、造り付けカマドの一部が確認された。これまで草津市内でのカマドの検出例はなく、貴重な調査例といえよう。今回の調査により、草津市南部における弥生、古墳時代の墓制ならびに、古墳時代集落の一端が明らかになり、調査例の少ないこの地域の様相を解明する手懸を得ることができた。

（草津市教育委員会 藤居 朗）

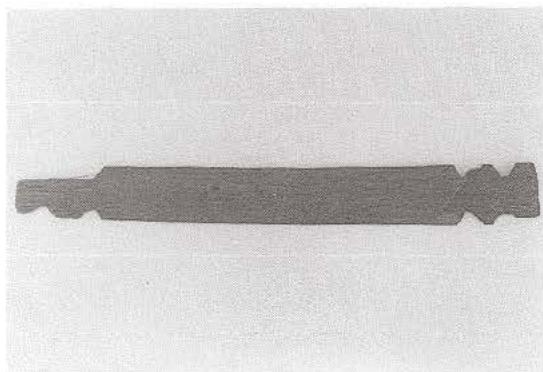


方形周溝墓群

5. 類例の少ない斎串状祭祀具出土
栗東町高野 高野遺跡

栗東町大字高野地先において、土地区画整理事業に先立つ第2次調査を1994年5月から1995年3月まで約5,000m²を対象に行なった。確認された遺構・遺物は以下のように7時期に分けることができる。

I期縄文時代、II期古墳時代、III期白鳳時代、IV期



平安時代の斎串状木製品

奈良時代、V期平安から鎌倉時代、VI期室町から安土桃山時代、VII期江戸時代以降。

縄文時代の遺構は、昨年建物の一部と思われるピット、壁溝らしきものが見つかった地点より約30m西へいった場所で確認された。主な遺構としては、木の実が集中して出土した土坑、落ち込み等がある。時期についてでは粟津SZ1式～北白川下層A式の頃のものと思われる。土器の他には石鎌・石錘・石皿が出土している。

一方、古墳時代から平安時代を中心とする川が長さ約150m、幅10m以上にわたって検出されている。出土遺物は多量の土器をはじめ、建築部材、祭祀具等の木製品、ふいごの羽口、石器が出土している。なかでも水辺の祭祀に使用していたと思われる平安時代の祭祀遺物（ヤス形、刀形、燃えさし、桃の種）の出土が注目される。その中に混じって、枝の両端に三角形の切り込みを左右2か所ずつ入れた珍しい木製品が出土している。大きさは、全長53cm、幅6cm、厚み0.8cmで、類例としては兵庫県姫路市八反長遺跡出土の木製品があげられる。用途は、一緒に出土した前述の祭祀遺物の状況から、祭祀具のひとつとして使用されていた可能性が高い。

今回の調査では、昨年に引き続き縄文時代の遺構が確認され、狩猟、漁労等の採取形態の一端がわかりつつあり、平安時代においては、水辺の祭祀を行なっていたと考えられる場所が見つかり、昨年出土した緑釉陶器の小壺と合わせて、有力氏族の存在がさらに濃厚となる資料が得られた。

（財栗東町文化体育振興事業団 近藤 広）

6. 13～14世紀の屋敷跡が出土
栗東町縄 縄遺跡

栗東町縄遺跡ではこれまでの調査で、おもに弥生時代の方形周溝墓群および中世の集落がみつかっている。遺跡の西側には、中山道が通過している。

縄遺跡は現在の大字縄および北中小路の両集落を含んでいるが、このうち北中小路集落の外側には、集落



井戸出土 漆椀



屋内棟持柱付建物

を囲むようにして、総延長200m以上に及ぶ大規模な濠がみつかっている。濠は、15世紀から17世紀のものと考えられている。今回の調査地は、濠の北限から約50m隔てた地点にあたる。調査では、13世紀から14世紀の屋敷地がみつかった。

屋敷地は2時期に分かれ、このうち13世紀代の集落は、幅約60cmと小規模な浅い溝で区画されている。調査区からは2区画の屋敷がみつかっており、それぞれに掘立柱建物、井戸、土坑などがみられる。建物には建て替えがみられる。

14世紀代になると、屋敷の区画が広がり、区画溝も幅約150cmと規模の大きなものになる。溝にはところどころ深い部分があり水溜めとしての機能があった可能性がある。

縄遺跡では、12世紀～13世紀になると溝で区画された建物群が各地区でみつかっている。ところが、それ以降の建物群の存在は不明な点が多く、15～17世紀の大規模な濠にともなう建物等も明らかになってはいない。この濠は現集落を囲むようにして存在しているので、当該期の集落は、現集落と重複している可能性が高い。今回みつかった13世紀から14世紀にかけての屋敷地は、これまで縄遺跡ではみつかっていなかった時期まで続くもので、しかも現集落と近接している地点での発見であることから、12世紀以降広がった集落と、15世紀以降の濠をともなう集落との過渡期にあたるものとして注目される。

(財)栗東町文化体育振興事業団 雨森 智美)

7. 弥生時代後期の大型掘建柱建物跡 栗東町野尻 野尻遺跡

町が計画する道路新設工事に先立ち約3,000m²の調査を実施した。野尻遺跡はJR栗東駅の東に広がる標高96～98mの沖積低地に立地する遺跡である。調査により、弥生時代後期の掘立柱建物跡2棟、河道、中・近世の土坑等を確認した。河道から北側は守山市を中心

として東西700m、南北400mの居住域をもつ大規模集落である伊勢遺跡の南東部にあたり、守山市域に接した地点で検出した大型建物は、近年発見が続いている大型建物群の一つとして注目される。その規模は桁行3間(6.9m)、梁行1間(5.3m)で、平面積は36.6m²である。屋内には中軸ライン上に4.5mの柱間で2本の棟持柱が配置されている。柱穴掘方は55～65cmの不整楕円形で、深さは約65cmである。柱痕跡は直径約25cmで、そのうち4か所でヒノキ材の柱根が遺存していた。

柱穴の特徴として、伊勢遺跡21次、28次調査の大型建物の柱穴に見られるような斜路は明確にはみられないが、楕円形掘方の一方に柱を寄せていることは柱を建てる際の工法として共通する。また、柱の側面に河原石を詰め込むなど21次の建物例と同様の特徴がみられる。なお屋内棟持柱の位置から、この建物は、入母屋造りの屋根形式に復元される。今回の発見により伊勢遺跡とその周辺では、数種類の大型掘立柱建物が存在したことになり、その機能により建物を造り分けていた事が推測され、弥生後期の集落や社会を考える上で興味深い。

その他の遺構として明治期の貯蔵穴状遺構がある。長辺170cm、短辺80cm、深さ33cmの土坑で、側面と底部には黄色の山砂を6cmの厚さで塗り固めている。陶磁器、瓦を加工した円盤、硯、滑石製の石筆などが廃棄された状態で出土した。明治7年にこの地に創設された小学校「月盛学校」に関わるものであろう。

(財)栗東文化体育振興事業団 佐伯 英樹)

8. 「靈仙寺」推定地を調査

栗東町靈仙寺 精仙寺跡

靈仙寺遺跡はこれまでの調査で、縄文時代中期、弥生時代前・中期の遺跡として知られており、周辺地域において比較的早くから開発がなされたことが判明している。

今回の調査は民間の工場建設に先立ち1,350m²の面

積で実施した。この地点は小字名が堂ノ西ということと、試掘時に布目瓦の出土をみていたので、いわゆる「靈仙寺」に関連する遺構の検出が期待された。検出遺構・遺物は以下の通りである。

弥生時代後期 調査区の南東から北西に流れる幅10m、深さ1.3mの河川と数条の水路で、その関係は12世紀末から13世紀の溝に切られるため不明確であるが、おそらく河川から導水する農業用水路等と思われる。その水路は3条の溝が合流する溜まりがあり、そこから2条分水している。幅1.5×4m、深さ1mの溜まり部分には縦杭に横木を組んだ護岸状のものが構築されている。

7世紀末から8世紀前半 南北方向に走る幅1m、深さ30~40cmの2条の溝が3mの間隔を置き並列して確認された。溝からは平瓦・丸瓦の他、各種須恵器が出土した。また、建物等の柱穴にはならない小穴から円面硯が1点出土している。

12世紀末から13世紀 3間×2間の掘立柱建物跡、幅3m、深さ40cmの溝、井戸を検出。

以上が調査成果の概略であるが、過去に出土をみなかった弥生時代後期の遺構を確認したことや、7世紀末から8世紀前半の南北溝、多量の瓦や円面硯の出土により寺院関連施設の存在する可能性が高まったことは大きな成果といえる。

(財)栗東町文化体育振興事業団 佐伯 英樹)



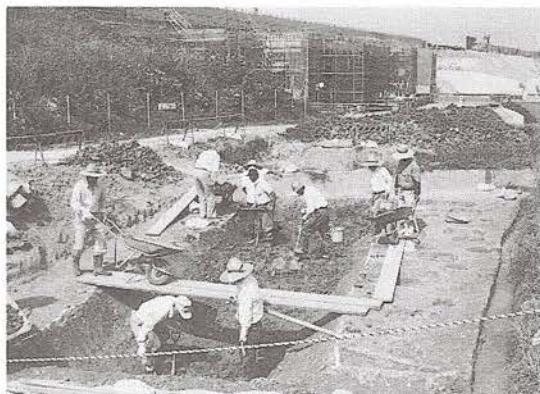
調査区北西部

9. 栗東町岡遺跡の調査

栗東町岡 おか 岡遺跡

栗東町岡遺跡は、古代栗太郡衙跡と推定されている遺跡で、昭和61年度から実施された発掘調査においては、「ロ」字形の配置を持つ建物群や大型倉庫群などの遺構が検出され、郡衙遺構の典型と認識されている。

さて、今回の調査は名神高速道路拡幅（下り車線）に伴うもので、調査地点は遺跡の東限付近と考えられてきた場所である。調査の結果検出された遺構は溝2



大溝の掘削状況

条の他、ピットの土坑、古墳などが存在するが、これらの中で郡衙との関わりが考えられるものとしては、溝2条が指摘できるのみである。

幅3mを測る大溝は、北から東に30°程度振った方向に伸びる。郡衙の建設が開始される7世紀後半に掘削されるが、郡衙としての機能を本格的に発揮する8世紀前半には人為的に埋められた状況が認められる。一方、幅1mの溝は方向的には大溝とほぼ共通するが、8世紀前半に掘削され9世紀頃まで存続している。岡遺跡が最も栄えた時代と一致する。

前者の大溝は規模や形状から、郡衙の東限の可能性を含め、遺跡の中核的な区画溝の一つと判断される。一方後者の溝は、せいぜい建物群などの小区画溝にすぎない規模である。従って、前者から後者へ、ほぼ同一地点で、しかも人為的埋没を伴っての変遷が確認できた点は、郡衙の建設が開始され、完成するまでの間に、計画が変更され、規模を変じていった可能性を示唆するものである。

今回の調査は、郡衙に伴う建物群などといった華々しい成果はなかったが、郡衙遺構群の成立過程を考えるうえで、極めて興味深いものがあった。今後類似する遺跡との比較から、この成立過程の具体像に迫りたいと考えている。

(財)滋賀県文化保護協会 細川 修平)

10. 県内最古級の墨書土器も発見

守山市播磨田町 まいいら 今市遺跡

今市遺跡は、守山市播磨田町に所在し、昨年度より県道矢橋・小島線の建設に伴い調査が進められてきている。昨年度の調査では弥生時代中期の方形周溝墓を2基検出している。今年度は約5,000m²を調査対象として発掘調査を実施した。

調査の結果、小道を挟んだ北地区では、弥生時代前期の土坑を4基、弥生時代中期の方形周溝墓を7基、墨書土器が出土した8世紀を前後する時期の溝を1条、



方形周溝墓群と墨書土器が出土した溝

灰釉陶器が出土した溝等を検出した。南地区では、縄文時代晚期以前の沼状遺構、弥生時代前期の方形周溝墓を2基、古墳時代前期の流路等を検出した。

北地区の方形周溝墓は一辺約8mの大きさのものが主体を占め、主体部は後世の削平を受けていたため確認することができず、周溝内土坑や周溝内ピット等も明確なものは検出できなかった。これらの方形周溝墓のうち6基は溝を共有するタイプのものであるが、一番南側で検出した方形周溝墓は溝を共有しない単独墓の可能性がある。弥生時代前期の土坑を北地区の南端で検出したが、甕・壺が出土する土坑の他、磨製石斧が出土した土坑も存在した。土坑からは高い確率で遺物が出土していることから、土塙墓等の可能性も考えられる。8世紀を前後する溝からは、墨書土器の他、同時代に比定される須恵器、土師器等が数点出土している。墨書は7世紀第四半期に比定される須恵器蓋の内面に4文字がはっきりと認められるが判読は不明で、字体が稚拙であるとの指摘や、朝鮮半島の金石文との関連も指摘されている。この墨書土器は滋賀県内では、最古級と言え、当時の人々が文字をどのように受容していたのかを考える上で貴重な資料となろう。

南地区での、方形周溝墓は一辺10mを越えるやや大きいものが存在し、溝を共有しない単独墓の可能性が高い。北地区の方形周溝墓と同様主体部、周溝内土坑、周溝内ピット等を確認できなかった。南地区中央では調査区に直交する方向の古墳時代前期の流路を検出した。今市遺跡の東約300m程に所在する八ノ坪遺跡では古墳時代前期の衣笠型木製品を出土した流路を検出しているが、流路の方向と時期がほぼ一致することから何かしらの関連があるのかもしれない。なおこの流路より南では方形周溝墓は確認できなかった。また縄文時代晚期以前の沼状遺構を南地区南部で検出した。同時代の土器は埋土上層より若干数出土しており、埋土中層から下層にかけては水性植物を主体とする植物遺

存体を多量に含む層が約1mの厚さで堆積していた。

(財)滋賀県文化財保護協会 大道 和人)

11. 縄文時代から中世の遺構を検出(第28次調査) 守山市伊勢町 伊勢遺跡

伊勢遺跡は守山市の南部、伊勢町集落を中心に広がる集落遺跡である。これまで28次におよぶ調査が行われ、縄文時代後期から近世にかけての遺構・遺物が検出されている。調査は土地区画整理事業に伴い、昨年度に引き続き、遺跡が立地している微高地の南辺とその南側の低地部の約9,000m²を対象としている。

今年度の調査では、これまでに縄文時代の竪穴住居1棟、弥生時代後期の溝・旧河道・方形周溝墓群、古墳時代前期の旧河道・古墳時代後期の竪穴住居1棟・溝、奈良時代から平安時代の旧河道、鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・溝・旧河道などを検出している。

縄文時代の竪穴住居は後世の削平をうけているためプランや規模は明確でないが、状況から直径5m程の円形住居であろうと推定している。住居の中央からは石囲炉が出土しているが、2つを残して石がすべて抜き取られていた。

弥生時代後期の旧河道は幅約20m、深さ約2m程の規模で、北東側肩口から多量の土器が出土した。土器は壺・甕・鉢・高杯・器台があり、完形のものも多く含まれる。この旧河道から栗東町界にかけては生活遺構は皆無である(低湿地状の地形を想定)。方形周溝墓は集落の西側微高地で現在までに6基検出している。規模は一辺が7~10m程である。

奈良時代から鎌倉時代の旧河道は遺跡が立地する微高地の縁辺を流れる現河川近くで検出した。このうち平安時代の旧河道の肩口付近からは集石遺構を4箇所検出した。「隆平永宝」1点や斎串状木製品2点が集石付近から出土したのをはじめ、木片の燃えかすが旧河道内から出土したことから、祭祀にかかわるものであると考えられる。

(守山市教育委員会 小島 瞳夫)



旧河道内土器出土状況